
リリカルなのはStrikerS ~ 過負荷の少年 ~

ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはStrikerS〜過負荷の少年〜

【Nコード】

N7197U

【作者名】

ZERO

【あらすじ】

ミッドチルダに『あの男』が舞い降りた。そこで出会った魔法少女たちに『彼』はどう関わっていくのか？

プロローグ（前書き）

ふとした思い付きで書いてしまった小説です。

基本メインはリリなの×フェアリーテイルの小説なので、こちらの更新は不定期になるかもしれません。

それではどうぞ。

プロローグ

始まりは唐突に訪れた。

「球磨川くん、ちょっと別の世界に行って来てくれないかい？」

「『は？』」

場所は何処かの教室。そこでは二人の男女『球磨川禊』と『安心院なじみ』が話し合っていた。というより、安心院が言った言葉に球磨川が面食らっているだけだが……

「『えーつと……』』『どういふことかな、安心院さん？』」

「言葉の通りだよ。生徒会戦拳編も終わったことだし、少年漫画のように新シリーズを始めようじゃないか」

「『『そう言つのはめだかちゃんか善吉ちゃんに言いなよ』』『僕みた

いな嫌われ者で憎まれっ子でやられ役にはそう言つのは向いてないよ』 『そもそも、そんなこと出切るのかい？』 「

「忘れたのかい球磨川くん。僕は7932兆1354億4152万3222個の異常性アブノーマルと4925兆9165億2611万0643個の過負荷マイナス…合わせて1京2858兆0519億6763万3865個のスキルを持つ女だぜ。人を異世界に送り込むスキルを持っていないわけないだろ？」

「『……………そうだったね』 『それで、なんでその役目が僕なんだい？』 「

「君は前に言ったね？嫌われ者でも憎まれっ子でもやられ役でも主役を張れるって証明したいと……………別の世界ならそれが叶うかもしれないよ」

「『…』 「

「それで、どつする？」

安心院の問い掛けに球磨川はしばらく考えた後、ゆっくりと口を開き…

「『いいよ』『面白そうだ』」

と言った。

「『それに異世界へ渡るだなんて少年漫画のようで燃えるじゃないか』『行かせてくれるって言うんなら、是非行かせて貰うよ』」

「球磨川くんならそう言ってくれればいいよ。じゃあ、これは僕からの餞別だ」

「『!?!?』」

次の瞬間、何と安心院は球磨川に口付けをした。そしてしばらくすると、安心院は唇を離す。

「ふふ。球磨川くんにセカンドキスマまであげちゃった」

「『……………!?!?』」

楽しそうに微笑む安心院にゴシゴシと口を拭う球磨川。

「なんてね。今の『口写し（リップサービス）』で君にまた『あのスキル』を貸して上げたよ。もちろん、君の『はじまりの過負荷^{マイナス}』はそのままにね」

「『いいのかい？』 『僕、結構このスキル気に入ってるんだけど…』」

「構わないよ。その方が君も心強いだろう？さて、そろそろ行つて来るといい」

安心院が指をパチンつと鳴らすと、教室の出入り口が輝き始める。

「あの扉をくぐると、目が覚めた時にはもう別の世界だ」

「『そう』 『それじゃ、みんなによろしくね』」

そう言い残して、球磨川は何の迷いもなく扉をくぐったのだった。

「あ…何の世界に行くか言っつのが忘れてた」

安心院がそう呟いたのは、扉の輝きが完全に消えたあとだった。

つじく

プロローグ（後書き）

無理矢理感は否めませんが、今はこれが精一杯です。

遭遇

「『さて…と』『ここは一体どこだろうっ?』」

球磨川は気がつくど、どこかの森の中に一人ポツンと立っていた。

「『まったく…彼女は変なところで適当なんだから………』」

球磨川は呆れたように言いながら森の中を歩き始める。すると……

ガサガサ…

「『ん?』」

突然近くの草むらがざわめきだした。球磨川がそちらに視線を向けると、そこからカプセルのような形をした数十体のロボットが飛び出してきて、球磨川を囲み始めた。

「『おいおい…』』来て早々トラブルかい？』』人気者は辛いぜ』』」

球磨川がそう言つと、数十体のロボットのうち一体が球磨川に向かってレーザーを放つた。

「『おつと…』』」

球磨川はそれを軽々と避けると、そのロボットに視線を向けた。

「『いきなり撃ってくるなんて、何て悪いロボットだ』』」

そう言つと、球磨川はどこからか巨大な螺子^{ネジ}を取り出す。

「『そんな悪いロボットは、僕が“螺子”伏せてあげるよ』』」

同時刻。森の上空を飛んでいる二人の女性の姿があった。一人は白い服に身を包んだ女性『高町なのは』。もう一人は黒い服に白いマントを羽織った金髪の女性『フェイト・T・ハラオウン』。

二人は先ほどガジェットの反応と次元震の反応があったため、その現場に向かっている最中なのだ。

「ガジェットの反応はこっちからだよね？」

なのはは隣を飛んでいるフェイトに問い掛ける。

「うん。でもガジェットがどんどん消えている」

なのは問いにフェイトはガジェットの反応を確認しながら答える。

「それに未確認反応と生命反応もある。もしかしたら誰かが戦っているかも……」

「でもとりあえず行ってみないとわからないよね……」

二人は消えていくガジェットの反応を気にしながらも反応があった場所に飛んでいった。

「なに……これ？」

「これは一体……！」

それからしばらくして、二人は現場にたどり着いた。だが、そこにあったのは巨大な螺子に貫かれた大量のガジェットの残骸だった。

「一体誰が……」

「『いやーこれは酷いね』」

「「っ!?!」」

突然響いてきた聞き覚えのない声に二人は身構え、視線をそちらに向けた。そこには、黒い学ランを着た一人の少年が立っていた。

「『機械が相手とは言え螺旋でメッタ刺しとは惨いことをする人がいるんだね』」
「『一体誰が面白半分でこんな惨状を作り出したのかはさっぱりわからないけど……』」
「『おっと、勘違いしないでくれ』」
「『僕が来た時にはもうこうなってたんだ』」
「『だから……』」

少年はそこで言葉を一旦区切り……

「『僕は悪くない』」

片手に螺旋を持った少年、球磨川は二人に向かってそう言い放った。

「「っ!!!?」」

そんな球磨川を目の当たりにしたなのはとフェイトの胸にある感情が芽生えた。

それは『嫌悪感』

球磨川の姿を見た途端、彼が敵であろうとも、彼が味方であろうとも、彼が何者であろうとも……どんな形であれ『関わりたくない』と思ってしまうた。

だが、彼女達の職業上、そう言うわけにも行かなかったため、そんな感情を押し殺して球磨川に話しかけた。

「えつと……君は？」

「『僕?』 『僕の名前は球磨川楔だよ』」

「ここで何をしていたんですか？」

「『うん、そうそうそれそれ!』 『聞いてよお姉さん』 『僕は今とても困ってるんだ』 『助けてよ』 『実は僕気がついたらこの森の中に居てさ』 『此処がどこだか分からないまま歩いてただけだ』 『

よかつたら此処がどこだか教えてくれない？」

球磨川の言葉に嫌悪感を感じながらもフェイトは平常心を保ちながら質問に答えた。

「此処はミッドチルダ付近にある森ですけど……」

「『ミッドチルダ？』 へえ、聞いたことないね」

「ミッドチルダを知らない？フェイトちゃん、この人……」

「うん。次元漂流者かもね」

なのはとフェイトは少し話し合っていると、球磨川が二人に話しかける。

「『ちょっとそこのお二人さん』 僕をほったらかしにしないでくれるっ？』」

「あ、すみません……」

「『ま、いいけどね』』とところでせつかく僕が名乗ったんだから君達の名前も教えてよ』』」

「あ、うん。私は時空管理局、機動六課スターズ分隊隊長の高町なのは」

「同じく時空管理局執務官、機動六課ライティング分隊長、フェイト・T・ハラオウン」

球磨川に催促され、自分の所属と名前を名乗るのはとフェイト。すると球磨川は首を傾げる。

「『時空管理局？』 『機動六課？』 『なにソレ？』」

「それについては後で説明します。とりあえず貴方には事情聴取のために私たちと同行してもらうけど、いいかな？」

「『え〜それはちょっとイヤだなあ』』とやりたいところだけど…』』
『君たちみたいな可愛い娘に連れて行かれるなら別にいいかな？』』」

そう言って、球磨川は同行を受け入れたのだった。

UJU

遭遇（後書き）

相変わらず無理矢理感がありますね……

機動六課（前書き）

やっちやっただぜ

機動六課

森の中で時空管理局と名乗るなのはとフェイトに出会った球磨川は、機動六課の隊舎に連れて行かれ、現在なのはとフェイトに挟まれるように歩いていた。

「『うわあ〜』『凄い建物だね』『まるで正義の組織の基地みたいじゃないか!』『』」

と、球磨川はやや興奮気味に喋りながら歩いている。そんな球磨川をなのはは「静かにして」と注意すると、ある一室の扉の前に立ち、ドアをノックする。そして「どうぞ」と返事が返ってくると同時に球磨川と共に部屋の中へと足を踏み入れた。その部屋には茶髪のシヨートカットの髪に髪留めをしている女性が椅子に座っていた。

「失礼します。高町なのはは一等空尉、任務の報告に参りました。」

「とりあえずご苦労さん。で、そこにいる人がフェイトちゃんが言っていた人なん?」

敬礼して報告するなのはに笑顔でそう言うと、茶髪の女性は球磨川へと視線を向けた。

「うん。えっと、球磨川くん。自己紹介してくれる？」

「『はい』」

そう言っ球磨川は一步前へ出る。

「『どーも初めまして』『この度こちらに保護された球磨川禊です！』『好きなものは少年漫画です』『よろしくお願いします！』」

「あ、うん…初めまして。私の名前は八神はやて。ここの部隊長をしております」

球磨川の自己紹介に戸惑いながらも女性・はやても自己紹介をする。

「『へー君が部隊長なんだ』『僕とあんまり変わらない歳なのに凄いな』」

「それほどでもあらへんよ。とりあえず球磨川くん、君は次元漂流者かもしれへん」

「『次元漂流者?』」

聞き慣れない単語に球磨川は首を傾げる。

「うん。たまに何らかの方法で自分の世界から別の世界へ移動してしまう人がいてるんよ。まあ簡単に言うたら迷子やね」

「『ふーんそつか』 『じゃあ僕は違うね』」

「『『え?』』」

「『だって…』 『僕は自分の意志でこの世界に来たんだから』」

「『『っ!?』』」

球磨川のその言葉にはやてだけでなく、その場にいたのはとフエイトも目を見開いた。

「ど、どついでのことや……!？」

「話を進める前に八神部隊長」 『催促をするように申し訳ありませんが』 『お茶をください』 『今すぐに』 「

はやてが球磨川の言葉の真意を確かめようとするが、次に球磨川が放った言葉でそれは遮られた。

「なにぶん彼女達に会ってここに来る前に随分と森の中を歩き回ったんで」 『のど』 『渴いてしまいました』 「

「……………そうか。ごめんな氣い利かんで。フェイトちゃん、お願いしてもええ?」

「あ、うん…………」

そう言つて、フェイトは部隊長室に備え付けてあるお茶葉と急須を使ってお茶を淹れ始める。その間、はやてはソファに座り始める球磨川をジッと見ていた。

「(球磨川くん……………不思議な人やな。おちゃらけているように見えて、その実…まったく私たちに話の主導権を握らせようとしてへん。それに、あの数十体ものガジェットを倒したんがこの人やとするん

なら、この人は相当な戦力になるかもしれない。それに何やるか？
球磨川くんからは魔力とは違う、何かがあるような感じがする……」

「さて、喉も潤ったところで球磨川くん」
はやてが球磨川を見ながらそう考えている間に、フェイトはお茶を
淹れ終え、球磨川に渡していた。

「『んっ』『おいしっ』」

「さて、喉も潤ったところで球磨川くん」

球磨川がお茶を飲んだのを見計らって、はやては話を再開させた。

「さっき言ってた、自分の意志でこの世界に来たっていうのはどう
いうことや？」

「『んー？』『そのままの意味ですよ』『僕は知り合いに「異世界
に行ってみないかい？」と誘われて』『それを承諾しただけなんで』」

「なっ…そんな簡単に出来るわけないやろ!？」

「『それが簡単に出来ちゃうんですよ彼女は』 『バトル漫画も真っ青なチートの塊だからね』」

「ほんなら、その彼女は何モンなんや？」

「『何モン…と言われても』 『僕の最後の恋の相手としか言いようがないね』」

「……………まあええわ」

そこら辺は深く追求せず、はやては本題を切り出した。

「でもな球磨川くん。この世界では無断で次元世界を渡ることは法律違反なんや」

「『へー』 『そうなんですか』 『じゃあ僕は逮捕されちゃうわけですか？』」

特に慌てた様子もなくそう返す球磨川。

「まあ、本来やったらそうなるんやけど……………球磨川くん。私たちに協力してくれへんか？」

「『……と言つと？』」

「君をこのまま犯罪者として本局に引き渡すと拷問や解剖、最悪…殺されてまうかもしれん。私らはそんなん嫌や。そこで球磨川くんには民間協力者として機動六課に所属して欲しいんや。球磨川くんへのメリットとしては時空管理局の一組織に所属する事で戸籍を騙すことができたり、民間協力者として機動六課に所属する事で、衣食住を確保出来るんやけど……どうやる？」

「『……』」

はやての説明を聞いた球磨川は「ふう……」と溜め息をつき、口を開いた。

「『やれやれ』『つまり君は遠回しに』『機動六課に協力しないとその本局とやらに引き渡すぞって』『僕に脅しをかけているんだろ？』『可愛い顔して……』『君はとんだ策士だよ』」

「『……そこまで分かるやなんて、球磨川くんは賢いんやね。ほんなら、どうしたらええかも分かるやんな？』」

「『……そうだね』『僕に残されている選択肢は一つしかない』」

「はやて!!!?」

突然の事態に呆然としていたのはとフェイトも悲鳴に似た叫び声を上げる。そんな中、はやてに螺子を刺した張本人：球磨川だけが不気味な笑みを浮かべていた。

「『僕に残された選択肢』 それは今ここで君を葬ることだよ』
八神部隊長 『」

「くっ……ゴホッ……!!」

驚愕と苦痛が入り混じった表情を浮かべながら口から血反吐を吐くはやて。

「『あれ?』 『何その顔?』 『女の子なら攻撃されなかった?』 『このボスを気取ってれば安全だと思った?』 『おしゃべりの最中なら死なないと思った?』」

そう言いながら球磨川はもう一本の螺子をはやての胸元へと当て……

「『甘えよ』」

その螺子を渾身の蹴り、はやての胸を貫いた。

……はずだった。

「はっ!？」

「『…が』『その甘さ』『嫌いじゃないぜ』『」

そう言うてはやてに向かってビシッと指を突き出す球磨川。だが、当のはやてはそれどころではなかった。

「（なんや…今の……幻覚でも錯覚でもない…痛みも感触も本物やった。けど…身体に刺さっていた螺子も、傷も、服でさえも血の後すら残ってへんやと…?）」

ふと、はやてはなのはとフェイトに視線を移すが、彼女たちも何が起こったのか分からず、困惑した表情を見せていた。

「『せっかく異世界に来たんだ』 『君たちに協力するのも面白いかもしれないね』」

一方球磨川は何事もなかったかのように会話を進めている。

「『さて…』と』 『そろそろお腹空いたし』 『ここに来る途中で見かけた食堂でご飯でも食べてこようかな？』」

そう言って球磨川はソファから立ち上がり、部長室を出ようとする。

「ま、待って！まだ話は「フェイトちゃん！」「……！」

部屋を出ようとする球磨川を止めようとするフェイトだが、はやての一喝で止められる。

「構わへん。食堂でゆっくりご飯食べてき」

「『さつすが部長』 『話分かる人だ』 『そんな部長』 『僕』
『結構好きですよ』」

そう言い残して球磨川は部隊長室を出て行き、食堂へと向かったのだった。それを見送ったフェイトははやてに問い掛けた。

「はやて！どうして？彼にはまだ聞きたいことが「私な……」……！」

フェイトの言葉を遮ってははやてが口を開く。

「この機動六課を設立する為に色々な所を駆け回って、色々な人に会^おって来た」

突然はやてが語りだした言葉に、フェイトとなのはは黙って耳を傾ける。

「けど、球磨川くんのようなタイプの人間は見たことない……！今まで会った人の中には今の地位で満足している人、さらに上の地位を目指そうとしている人が殆どやった。でも球磨川くんはどれとも違^{ちが}うんや……上やのうて、下を目指している人間……！」

そこでははやては一旦言葉を区切り、再び口を開く。

「もしかしたら……私はとんでもない人を引き入れたかもしれん」

そんなはやての言葉になのはとフェイトは何も返せず、その言葉は部隊長室に、ただ虚しく響いたのだった。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7197u/>

リリカルなのはStrikerS ~ 過負荷の少年 ~

2011年8月15日16時44分発行